

第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

Folliculosebaceous cystic hamartoma arising in Miescher-type melanocytic nevi

Miescher 型母斑細胞母斑に生じた Folliculosebaceous cystic hamartoma の
臨床病理組織学的検討

日本医科大学大学院医学研究科 皮膚粘膜病態学分野
大学院生 石原 優里

American Journal of Dermatopathology, volume 44, number 11, 2022 掲載

DOI: 10.1097/DAD.0000000000002290

Folliculosebaceous cystic hamartoma (FSCH) は、拡張した毛包漏斗部様囊腫構築と間質成分から成る稀な過誤腫である。FSCH の 4.6% に Miescher 型母斑細胞母斑 (MMCN) を合併していたとの報告はあるが、MMCN はどの程度の割合で FSCH を合併するかに関する報告は今まで無かった。そこで申請者らは、日本医科大学武蔵小杉病院皮膚病理診断室で、顔面、頸部、頭部に発症し、MMCN と病理診断された 7829 例を用いて、FSCH の所見を伴うか否かを解析した。また、比較対象として MMCN を伴わない FSCH の症例 (62 例) についても同様の解析をした。

MMCN (7829 例) のうち、2080 例が男性、5749 例が女性であり、男性例は女性例と比較して有意に高齢であった ($p < 0.01$)。MMCN のうち FSCH の所見を伴っていたものは 3.4% (274/7829) であった。FSCH を伴う MMCN は FSCH を伴わない MMCN と比べて有意に高齢であった ($p < 0.05$)。男女別の合併率は、男性が 4.3%、女性が 3.2% であり、男性において有意に高かった ($p < 0.05$)。合併例の切除部位は鼻部 (鼻尖部 + 鼻翼部 : 20% <137/674>、鼻根部 + 眉間 + 鼻梁部 : 10% <54/538>) が最も多く、次いで眉毛部 (3% <8/271>)、耳周囲 (2% <4/187>)、頬部 (2% <52/252>) であった。MMCN を伴わない FSCH (62 例) は、男性 41 例、女性 21 例であり、切除部位は頭部 (26% <16/62>) が最多であり、次いで頬部 (16% <10/62>)、鼻周囲 (10% <6/62>) であった。

頭頸部の MMCN の約 3% に FSCH を合併しており、その合併率は過去の報告と同様に鼻部とその周囲に多く、10~20% と高率であった。FSCH は毛包-脂腺分化を特徴とした腫瘍であるため、鼻部や頬部などの正常な脂腺が豊富に存在する脂漏部位に多く出現すると考えた。MMCN を伴う FSCH、MMCN を伴わない FSCH とともに男性優位に発症しているのは、男性の方が脂腺の発達がより目立つためと考察した。鼻周囲に発症した FSCH を伴う

MMCN の切除年齢は、FSCH を伴わない MMCN に比べて有意に高齢であった。MMCN は膠原線維の増生、脂肪変性、小血管の増生などの所見を伴うことが知られており、鼻周囲に存在していた MMCN が FSCH を誘導した可能性が考えられた。

第二次審査では、①悪性化の報告、②合併例と非合併例での治療上の相違、③合併例における間葉系幹細胞の意義、などに関して質疑がなされ、それぞれに対する的確な回答が得られ、本研究に関する知識を十分に有していることが示された。

本研究は MMCN に生じた FSCH の臨床病理組織学的検討を多数例で詳細に行った初めての報告であり、その臨床的意義は高いと考えられた。以上より本論文は学位論文として価値あるものと認定した。